

教会とキリスト者の成熟 —神の国の視座の中で—¹

坂井純人

はじめに:<講演者の岩上氏と石崎氏への感謝と応答者の基本的スタンスについて>

2021年の全国研究会議において、講演者の岩上氏と石崎氏より、有益かつ示唆に満ちた、丁寧な基本的視座が提供されたことに、まず、感謝と敬意を表したい。

岩上氏は、パウロ書簡におけるギリシア語の形容詞 τέλειος と動詞 τελειόω に着目し、ピリピ人への手紙 3 章 12 節-15 節、ローマ人への手紙 12 章 1 節-2 節、エペソ人への手紙 4 章 11 節-13 節の釈義的考察から、いずれも、キリスト者個々人のみならず、「教会」としての成熟が一体的に志向されていると結論付けておられる²。また、キリスト者の頭なるキリストこそが、唯一の「完全な者」、「成熟し」、「完全に至った唯一の御方」であるとして、パウロの目指すべき模

¹ 本稿は、昨年（主の 2021 年 11 月）に開催された第 16 回日本福音主義神学会全国研究会議におけるセッション（1）「教会とキリスト者の成熟」の主題で発題された、岩上敬人氏と石崎伸二氏の先行講演への応答原稿に加筆、訂正を加えた論考である。

² 岩上敬人「パウロ書簡における教会人としてのキリスト者の成熟」本号 22 頁、25 頁

範としてのキリストの生き方に倣う動線<V字パターン>の軌道を描き出している。これは、キリストの完成の希望に結ばれながら、この世では、キリストの苦難にも結ばれて、栄光に向かうキリストの死と同じ状態になることを希求、志向する生き方を意味する。これが、ピリピ教会を典型例とする「福音に至る交わり、あるいは、福音の為の交わり」と位置付けておられる³。このキリストの生き方<苦難と栄光の希望>に結ばれる時に、終わりの日に完成する「キリスト者の完全」に至る成熟した姿になる、という考察である。

石崎氏は、ルーテル教会の神学的伝統から、特に、 sacramentalな理解を中心に洞察し、キリスト者と教会人としての成熟を、頭なるキリストに結びつく「キリストのからだ」理解の内に、一体的事柄として扱っておられる。主イエスの福音を起点とし、キリストのからだとしての教会が、成熟していく様を、律法の下での罪の悔い改めと福音における主イエスへの信仰を通して、聖礼典の恵みに与る祝福の光の中で、考察している⁴。特に、キリスト者が、試練と苦しみを楽しむ中で、キリスト者としての使命を、信仰をもって果たして行く姿の中に成熟したキリスト者像を見出している⁵。これは、福音によって罪と呪いから救い出された喜びをもって、新たな人として、主と隣人に仕える「キリスト者の自由」の光栄に浴する終末論的姿勢と言えるであろう。この視座を、個人化することなく、共同体として与る聖礼典の恵みの中で、特に「罪の赦しの宣言と喜びに生きる」終末論的希望へと展開する視点は、福音理解の深まりへの促しと共に、岩上氏の終末論的視座と軌を一にしている、と言える。

他方、石崎氏は、コロナ禍で、教会共同体の成員が、「一つに集まること」が困難な現況で、聖餐を中心とする教会共同体の形成をいかに維持し、試練の中でのキリスト者と教会の「成熟」に至ることが可能か、を焦眉の課題として、問うておられる。これは、コロナ禍の中で、キリストの苦難に結ばれた者として、十字架の相の下で、キリスト者と教会が、生きた現実の中で、自らの希望

を問う姿勢を提示した岩上氏と共通している。

いずれの講演者も、キリストにある召しを個人的救済の枠に閉じ込めず、教会共同体、さらには、神の国の広がり視野の中で、しかも終末的成就に向かう緊張と希望の中で、「教会とキリスト者の成熟」の課題を見つめるべきである、と指摘している。「教会とキリスト者の成熟」の課題を、個人主義的に捉えず、個人の救済と共同体形成の結び付きを本来、一体のものとして、聖書と教会の信仰告白が論じているとの主張に応答者も心からの賛意を表したい。同じ、プロテスタント、宗教改革の伝統と福音主義の流れに身を置く応答者の基本的視点も同様だからである。この理解を前提に、応答者としては、二人の講演者との重要な共通点の確認と共に、論者が属する改革派教会の信仰と神学的伝統における<キリストとの結合>の理解の重要性を中軸として、「教会とキリスト者の成熟」の課題を考察する視点を紹介し、両講演者への応答を試みたい。特に、応答者は、「教会とキリスト者の成熟」の根拠を問う視点を軸に、その終末論的成就の希望は、三位一体の神の御業としての「神の国の完成」の中で確証される、という視座を提示することを試みたい。二人の講演者の方向性を真に実現する希望は、何処に見出すことが出来るのか。応答者は、改革派神学の立場から、この点を<キリストとの結合>の視点を軸に展開し、キリストとの結合がもたらす希望が、さらに、三位一体の神の御業としての「神の国の成就」に至る終末論的希望に至る点を明示したいと願っている。

I：<神論・創造論・人間論的基礎付けからの「教会とキリスト者の成熟」への視点>

①三位一体の御神の存在に象って造られた<神のかたち>としての人間存在と「成熟」と「完成」に向けての基本的視座

聖書的人間論の基礎的、前提的了解事項を、まず、創造論から、確認しておきたい。それは、人は、三位一体の神のかたちに象って創造されたという言明である（創世記 1:26, 27）。<神のかたち>の理解の内に、三位一体の神という創

³ 岩上「パウロ書簡」12頁

⁴ 石崎伸二「教会とキリスト者の成熟に関する教会論的検討」本号 44-46頁

⁵ 石崎「教会とキリスト者の成熟」46-49頁

造主に依存し、この御方と対話しつつ生きる存在である点と、男と女とが、互いに、愛し、愛される人格的交わりに生き、愛する対象としての他者を必要とする＜社会的存在＞であることが含蓄されている。ここに、具体的に、人間存在が、互いに愛し、愛されることを必要とする交わりに生きる社会的存在である事実の原点がある。

さらに、創造は＜良き創造＞であるが、「生めよ、増えよ。地を満たせ。」という夫婦、家族の絆、営みを通しての主への信仰的聴従を通しての共同体形成が、終末論的な方向性をもって命じられていることにも注目したい。つまり、創造の目的は、真の神を崇める生き方を、人格的交わりと共同体形成の内に、「成熟」させ、やがて来たりたもう＜終末論的＞完成に向けて、成就するように、方向付けられていたのである。ここに、墮落以後の回復以前に、「成熟」に向けて創造された、良き創造の、摂理的、時間的成熟、完成への視座が基礎付けられるであろう。この意味で、改革派神学における創造論は、「終末論的」と言われ、かつ、「終末論」は、「創造の祝福の回復と完成」と称される所以がある⁶。

この枠組みで事柄を考察する時、神のかたちである、人間存在である＜人格＞は、最初から、終末の完成に至るまで、神に導かれつつ、＜孤立＞してではなく、＜共同体形成＞の内に、終末的完成に向かって、＜成熟＞を期待されて、この世界に遣わされたことが、明らかにされる。当セッションのタイトルが、「教会とキリスト者の成熟」となっている消息は、改革派神学においては、創造論から終末論に向かう基本的な視座の内に、基礎付けられている点が重要である。神によって創造された生命と人格的存在は、神との交わりと人格的存在同士の交わりの内に、成熟し、創造の祝福と安息の完成へと向かって生きる終末論的希望へと踏み出すように、創造、摂理されていたと言えよう。この御業は、最も大きな神学的枠組みとしては、三位一体論的聖定論的展開となり、改革派神学の主流においては、「業の契約」と「恵みの契約」の連続性と非連続性が、主との命の交わりの中で「キリストとの結合」として、「神のかたち」とし

ての回復に至り、終末論的視座の中で、「神の国」の完成として成就する希望を志向することになる。

②＜人間の墮落と神による贖いの御業に生かされる人間＞

人間は、真の創造主であり、霊的命の源泉である神の愛と御言葉に背いて、墮落してしまった。しかし、神との人格的交わりを回復するべく、神の御子、主イエス・キリストが、救い主として来て下さった。この御方の恵みに結ばれて、人は、＜キリスト者＞として、再生し、新しい人生へと甦らせられるのである。ここに、キリストのからだとしての再生と成熟への生き方も新たに主の道として備えられることになる。この視点も、改革派神学においては、神の下さる命の交わりとその完成を終末論的に志向していた「業の契約」とこの契約が人間の罪によって破棄された後も、キリストを仲保者とする「恵みの契約」の付与と成就により、創造の目的である人格的存在の「成熟と完成」がキリストと聖霊の御業によって、回復、完成へと導かれる三位一体論的な恩寵の勝利へと至る。神との「命の交わり」は、キリスト論的、聖霊論的経綸の御業によって、個々の救済と共同体としての一体性、成熟と完成への希望が強化される道筋を辿るのである。この軌道の理解において、墮落した人間が、キリストの贖いに与り、教会の礼拝、礼典、交わりを通して、キリスト者としての成熟に至る方向性の理解は、二人の講演者と応答者共に、共通の福音の基盤に立っていると言えよう。

③＜キリストの御業論による「神のかたち」の回復＞

次に、応答者は、「教会とキリスト者の成熟・完成」は、いかなる根拠の内に、希望として見つめ得るのかを問いかけたい。人間論からキリスト論に接続して、論じる視点は、もちろん、聖書的である。しかし、同時に、墮落した人間がもはや、罪の世では経験しえない「完全な人性・栄光化された人間本性」を勝ち取

⁶ 牧田吉和『改革派教義学』7「終末論」（一麦出版社、2019年）262頁を参照。

られたキリストの受肉と、苦しみ、従順を通して「完全な者とされ、ご自分に従うすべての人にとって永遠の救いの源」(ヘブル人への手紙 5 章 9 節)に結ばれる時の希望、確信の根拠は「キリストとの結合」である。キリスト者と教会の行くべきゴールをすでに勝ち取られた御方との聖霊による「キリストの福音」を信じる信仰を通して結合する者達は、キリストの完全な栄光化された本性(復活、昇天、着座のキリストの人間本性)に、今、ここで結ばれている。そして、終りの日の再臨、復活、最後の審判の時には、「御子に似た姿」に変えられる約束に生かされている。

岩上氏の語られるキリストの V 字の軌道は、キリスト者と教会の辿る模倣でもあると同時に、その前提としての「キリストとの結合」のリアリティーがもたらす、聖霊による現実である。キリストとの結合の永遠的次元、歴史的キリストの御業との結合の次元、聖霊による再生者の信仰を通しての現実的結合に生きる者達は、やがて訪れる「キリストとの結合」の完成をも約束されているのである。

II：＜救済論と教会論の視点から＞

改革派神学においては、＜救済論＞の中心は、キリストとの結合である⁷。聖霊により、再生させられた者が、福音を信じる信仰を通して、神と人との仲保者キリストに結ばれることにより、あらゆる救いの祝福が注がれることになる(ウェストミンスター大教理問答、問 65-66)。キリストは、＜恵みの契約＞の仲保者であられるが故に、個々人のみならず、＜神の民とキリスト＞との結合を通して、キリストのからだなる教会の成熟へと導く教会の頭であられる。改革派神学においては、キリストに結び付ける聖霊の御働きの理解において、教会論と救済論は、＜キリストのからだ＞としての救いとなる(ウェストミンスター大教理 62-65 問参照)。本稿の中心には、改革派神学における「キリスト

との結合」の意義と重要性についての理解が根底にある。以下に示す要諦において、他派の伝統の方々とも真理契機を共有することが出来れば幸いである。

第 1 節＜改革派神学・信条史におけるキリストとの結合の理解＞

改革派神学におけるキリストとの結合の理解は、救済論において、決定的に重要である。カルヴァンは、キリストによる救いの祝福の全体をキリストとの結合の内に見出している。

したがって、首と肢との結合、我々の心におけるキリストの内住、要するに彼との神秘的結合が我々にとっての最高の段階であり、これによってキリストは、我々のものとなり、我々は彼にある諸々の賜物の共有者となるのである。それ故、その義が我々に加算されないほどキリストが遠く我々の外におられるかのように考えてはならない⁸。

つまり、キリストが我々の救いの為に獲得されなかった救いの祝福はなく、逆に、キリストが獲得されずに、我々のものとして与えられる賜物もない。ここに、キリストの御業の持つ決定性と共に、この御業を我々の内に適用される聖霊の御業との連携への洞察も重要であることが明らかになる。キリストが救いに必要な全てを獲得されたのに、聖霊が一部しか適用されない事態はない。三位一体の神の経綸的御業において、「外なる御業は分かたれない」のである(Opera Dei Trinitatis ad extra sunt indivisa)。

それ故、改革派神学史においては、救いの始原と保持と完成の一切は、神の主権的恩寵に依存している。この究極性を表現するために、カルヴァンのように、救いの総体の中心にキリストとの結合を見る例や、後の J・マーレーのように、救いの道の最後に終末論的希望の教説として置く例がある。さらに、岡田

⁷ 牧田吉和『改革派教義学』5「救済論」(一麦出版社、2016 年) 58 頁を参照。

⁸ カルヴァン『キリスト教綱要』Ⅲ(新教出版社、1963 年) 259 頁、11 章 16 節。傍線は筆者による。